

# Eco-Philosophy

Vol. 5



**TIEPh**

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

# 東洋大学「エコ・フィロソフィ」研究第5号

## Contents

『「エコ・フィロソフィ」研究』第5号の刊行に寄せて 山田利明・・・1

## TIEPh 活動組織

2010年度活動報告

### I TIEPh 第1ユニット 自然観探求ユニット

- 天地壊滅とメシア 山田利明・・・11
- 生涯は鏡中に在り—唐代の「鏡」の詩— 坂井多穂子・・・19
- 中国近代文学における自然観の変容—郭沫若の新詩誕生をめぐって—  
横打理奈・・・27
- 「森(もり)」の効用、「杜(モリ)」の意味  
—生態学的合理性と「自然観の合理性」による持続型社会—  
関(山村)陽子・・・43

### II TIEPh 第2ユニット 価値観・行動ユニット

- 環境問題の社会的ジレンマにおけるボランティア行動 大島 尚・・・57
- 文化心理学から考える環境配慮行動 菅さやか・・・67
- 環境教育・ESD と心理学的研究 東垣絵里香・・・73

### III TIEPh 第3ユニット 環境デザインユニット

- 生物多様性という課題 河本英夫・・・83
- 絶えず別様の仕方で—荒川修作と創造する環境— 稲垣 諭・・・93
- 環境哲学に対する現象学の試論  
—フッサールの『イデーン』を手掛かりにして—  
武藤伸司・・・105
- テンダー・エマージェンス—来るべき自己へ 河本英夫・・・117

**IV 寄稿論文**

「サステイナビリティ学」における「人間システム」

—人文科学のニッチと「意味言語」、人間存在論からのアプローチ—

上柿崇英・・・・131

**V Summary**

・・・・・・・147

**VI 講演会資料**

・・・・・・・153

## TIEPh 活動組織

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田利明 代表（センター長） 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村牧男 自然観探究ユニット
Kohei YOSHIDA	Professor, Nature Unit	吉田公平 自然観探究ユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Professor, Nature Unit	山口一郎 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Lecturer, Nature Unit	坂井多穂子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤清志 価値観・行動ユニット
Yoshiaki IMAI	Professor, Values and Behavior Unit	今井芳昭 価値観・行動ユニット
Hideya KITAMURA	Professor, Values and Behavior Unit	北村英哉 価値観・行動ユニット
Naoya SEKIYA	Associate Professor, Values and Behavior Unit	関谷直也 価値観・行動ユニット
Sayaka SUGA	Assistant Professor, Values and Behavior Unit	菅 さやか 価値観・行動ユニット
Satoshi INAGAKI	Assistant Professor, Environment Design Unit	稲垣 諭 環境デザインユニット
Ayano TANAKA	Research Fellow	田中綾乃 特別研究員

Rina YOKOUCHI	Research Fellow	横打理奈 特別研究員
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 特別研究員
Yoko SEKI(YAMAMURA)	Research Associate	関(山村) 陽子 研究助手
Kazunari HATA	Project Research Assistant (PRA)	畑 一成 リサーチアシスタント
Erika HIGASHIGAKI	Project Research Assistant (PRA)	東垣絵里香 リサーチアシスタント
Shinji MUTO	Project Research Assistant (PRA)	武藤伸司 リサーチアシスタント

## TIEPh 2010 年度活動報告

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo University＝略称 TIEPh）は、平成 18 年 6 月から文部科学省の科学技術振興調整費により運営され、「エコ・フィロソフィ」構築のための戦略拠点として活動してきた。昨年度に調整費の交付が終了し、TIEPh は新たに学内研究機関として出発することとなった。今年度前半は、一般社団法人サステナブル・サイエンス・コンソーシアム（SSC）に加盟するとともに、まず組織の見直しを行った。これまでと同様に、3つのユニットの継続を決めたが、第2ユニットについては、環境についての価値意識調査だけでなく、環境に配慮した行動の規定因についても検討すべく、「価値意識調査ユニット」から「価値観・行動ユニット」へと名称を変更した。さらに、研究員・特別研究員の充実を図った。新たな組織となったことを周知するためと、今までの研究成果を広く公開するために HP を一新した。また、Newsletter を発行した。

各ユニットの主な活動は次の通りである。第1ユニットは、11月の「宗教と環境—地球社会の共生を求めて」というシンポジウムの後援を行い、宗教者が環境問題に対して何が出来るかを問うた。10月には、第2ユニットを中心として、「環境人間学」と題する公開セミナーを開催した。セミナーでは、東京農工大学の尾関周二氏による講演と、第2ユニットの研究員らによる発表が行われ、環境哲学と社会心理学が相互の研究成果を知る場となった。第3ユニットは、10月の精神病理・精神療学会、12月の第2回人間再生研究会で発表を行い、ユニットの課題である環境デザインの拡張に取り組んだ。

イニシアティブ全体としては、今年度も本学の学部学生を対象に、全学総合科目として「エコ・フィロソフィ入門」の講義を行った。また、小冊子『NEW サステナ』への寄稿を行った。なお、3月に開催の準備を進めていたシンポジウムであるが、東北関東大震災の影響により中止となった。多くの方から、中止を惜しむ声が聞かれ、次年度に何らかの形でお応えできるよう、検討中である。

4月～7月

---

東洋大学の「全学総合授業」として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講  
2010年度 全学総合 IA 『エコ・フィロソフィ入門』

7月

---

・ニュースレターNo 10 発行

「「エコ・フィロソフィ」の構築に向けて」アプローチ開催」山田利明

「第1ユニット「自然観探求ユニット」の課題」竹村牧男

「第2ユニット「価値観・行動ユニット」の研究目標について」大島 尚

「第3ユニット「環境デザイン」ユニット」河本英夫

・25日

『サステナ NEW』第15号へ寄稿

山田利明 連載エッセイ「橘薫る」

10月

---

・7～8日

**TIEPh 共催 精神病理・精神療法学会 第33回大会**

場所：東洋大学白山キャンパス

・9日

**TIEPh 共催 講演会**

テーマ：「環境と精神—身体状況の哲学」

場所：東洋大学白山キャンパス

・23日

**TIEPh 主催 公開セミナー**

テーマ：「環境人間学 —環境問題への「人間学的」アプローチ—」

基調講演者：尾関周二氏（東京農工大学教授／環境思想・教育研究会代表）

研究報告：大島 尚、今井芳昭、東垣絵里香

司会：大島 尚

コーディネーター：関（山村）陽子、武藤伸司

共催：環境思想・教育研究会

後援：一般社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム

場所：東洋大学白山キャンパス

・ 25 日

『サステナ NEW』第 16 号へ寄稿

山田利明 連載エッセイ「江戸の食事」

11 月

---

・ 6 日

**TIEPh 後援 シンポジウム**

テーマ：「宗教と環境—地球社会の共生を求めて」

講演：クリストフ・ムント氏

場所：東洋大学白山キャンパス

・ 13 日

**TIEPh 後援 講演会 環境思想・教育研究会 第 15 回例会**

場所：東京農工大学府中キャンパス

12 月

---

・ 13 日

**TIEPh 共催 研究会 第 2 回人間再生研究会**

場所：東洋大学白山キャンパス

2 月

---

・ ニュースレター No 11 発行

「環境人間学—環境問題への「人間学的」アプローチ—開催」今井芳昭

「第 2 回人間再生研究会報告」稲垣 諭

「宗教と環境—地球社会の共生を求めて報告」竹村牧男

「クリストフ・ムント氏特別講演を聴いて」武藤伸司

「日本の公害・環境問題—歴史的教訓と課題講演を聴いて」東垣絵里香・千田一輝



・ 15 日

『サステナ NEW』第 17 号へ寄稿

山田利明 連載エッセイ「ところ変われば……」

3 月

---

・ 『「エコ・フィロソフィ」研究』第 5 号刊行

・ 19 日 TIEPh 主催 東洋大学創立 125 周年記念 公開シンポジウム

→東北関東大震災の影響により急遽中止

テーマ：「サステナビリティの思想—哲学としてのエコロジー」

基調講演：武内和彦氏、八木信行氏、小池百合子氏

パネリスト：住 明正氏、松尾友矩、山田利明

後援：一般社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム (SSC)

場所：東洋大学白山キャンパス

## I      —TIEPh 第 1 ユニット 自然観探求ユニット—

我々がライフスタイルを改革・実践していくには、その人にとっての確たる思想が自覚されていることが重要であろう。その思想は、決して借り物ではない、真に自分自身の存在の根底から築きあげられたものでなければならないに違いない。単に西洋は行き詰まっている、東洋は可能性があるという、表層的な印象による気分のみでなく、日々、自己が生活し呼吸している場を形成している社会・文化の深層にあるものを汲み上げて、現代社会の課題に取り組むべきであろう。そういう立場に立って、我々は東洋の自然観、日本の自然観の核心にあるものを掘り下げたいと思うのである。

科学者の中には、近年の温暖化等々の影響によって、実はこの地球世界はもう 50 年いや 30 年も持たないと、真剣に警告している方もいる。事態はまことに深刻であり、今やサステナビリティを追求する実践が急務であることも、きっと間違いないことであろう。未来世代のいのちあるものの身のうえを思うとき、できるかぎりの実践を行わずにはいられない。また、できるかぎり社会の仕組みの改革に、関与していくべきであろう。政策への意思表示のほかにも、たとえば、リサイクル・システムへの協力や、フェアトレード運動への参画など、考慮すべきことは多い。

と同時に、自己と自然環境のあり方、自己と他者のあり方、について、深い洞察を獲得し、人々と共有していくことも、問題解決への道を根底において支えることになるであろう。それは短期的な効果は希薄かもしれないが、長期的にはぜひとも必要なことである。とりわけサステナビリティのことを想うとき、未来の見知らぬ他者との関係をどのように自覚するかが課題となる。このような問題を、今はやりの言葉でいえば、可視化していくことが必要である。自然観の探究の視点にも、そうした観点を導入しての、意欲的な研究が重要だと思うのである。

## II —TIEPh 第 2 ユニット 価値観・行動ユニット—

TIEPh では、2007 年から 2008 年にかけて、第 2 ユニットが中心となり、シンガポール、中国、ベトナム、日本において環境に関する価値観調査を実施しました。調査結果からは、自然観、生活観、科学観などに地域差があり、それらが環境保護の意識と関連していることが明らかとなりました。また、西洋諸国を対象とした同種の調査との比較から、東洋と西洋の間の価値観の文化差も示されました。このような、価値観の地域差や文化差が、環境配慮の意識や行動にどのような影響を及ぼしているのかを知ることが、第 2 ユニットの研究テーマのひとつです。今後も経済発展の著しいアジア諸国を中心に調査研究を継続し、人々の価値観という側面からエコ・フィロソフィについての考察を進めていきたいと考えています。

一方、社会心理学の観点からは、環境問題は社会的ジレンマの事例としてとらえることができます。社会的ジレンマとは、個人の利益と社会の利益とが両立しない状況を指し、個人個人がそれぞれに自分の利益を追求すると社会全体として不利益が生じるというものです。社会的ジレンマは解決が難しい問題として知られており、環境問題においても個人が快適で便利な生活ばかりを求めるのではなく、地球社会や未来社会の利益のために行動するようになる条件が模索されています。第 2 ユニットでは、集団やコミュニティにおける社会的な人間関係の視点から、解決策を探る研究を積み重ねています。

環境に配慮した行動を取るための条件を個人のレベルで見ると、行動することの重要性はわかっているにもかかわらず、実際に行動には移せないという状況が明らかとなります。このような認識と行動の不一致はさまざまな場面で見られ、社会心理学の基本的な研究テーマのひとつとなっています。そこで、環境配慮行動に影響を及ぼす社会的な要因を明らかにし、行動を促す具体的な方策を提言することも、第 2 ユニットの研究目標のひとつです。特に、社会的な規範意識の形成や、広告や説得などのコミュニケーションの効果を調べる研究が進められています。

社会心理学は、現実社会のさまざまな問題を扱っていますが、環境問題に関する研究は、その社会的な重要性の割にはまだ十分な広がりを見せていません。TIEPh の第 2 ユニットは、この分野の社会心理学的研究を推進する拠点となるべく積極的に活動を進めていきたいと考えています。

### Ⅲ -TIEPh 第3ユニット 環境デザインユニット-

環境デザインの課題は、環境設計をアイデアとして企画し、現実の環境問題に対して、より多くの選択肢を提示していくことである。現在の環境問題への対応は、それほど多くの選択肢の中から選択がなされているわけではない。それらの多くは、現実の行動を抑制する方向で課題設定されることが多い。二酸化炭素を出さないように、つつましやかなで、禁欲的な生活のモードを模索するというような、いわば生活態度の規制を目指すものも多い。エレベータに乗るよりも、できるだけ階段を歩こうというスローガンは、個々人の倫理的態度に訴える以上、少し無理がきている。むしろエレベータに乗るよりも、階段を上った方が面白く、その階段を登れば、いくつもの経験ができるような階段を設計してしまうことに力点を置くのが、環境デザインの課題である。そこには身近な小さなアイデアから、都市設計にいたるまで、さまざまなレベルの課題がある。たとえば歩行者の集中するエスカレータを降りた直後の通路には、発電板を設置して、歩行頻度がおのずと自家発電につながるような工夫である。

こうした課題設定が目指すのは、現実の生活において、個々人ごと、あるいは個々人間の選択肢を増やすことである。江戸時代のように物質循環の範囲で生活をしようと希望するものには、そうした選択が可能となり、ニューヨークのような生活を送りたいものにはそうした選択が可能となるような、多重回路網の設定である。こうしたなかで個々人は、みずから工夫しながら、生活することができるような設計である。こうした工夫をつうじた個々人のライフ・デザインは、その人のセルフ・デザインであると同時に、間接的に環境問題に寄与するような設計を行うことになる。素材は過去のアジアの智慧にも、最先端の科学技術にも広く分布している。必要とされるのは、選択肢に満ちた工夫である。

## IV 寄稿論文

## V Summary

### **Destruction of Heaven and Earth the Messiah**

**YAMADA Toshiaki**

The Old Testament account of the creation includes the story of Noah's Ark, which described how only Noah and his family, who lived with God in their hearts, were spared to create a new world when a great flood cleansed the earth of the wicked.

Similar thought from fourth and fifth century China also exists, which says seed people that only the righteous will survive a flood of unprecedented proportions to become the *zhong-min* (in Chinese eschatology, those who will survive the destruction of heaven and earth).

This paper discusses the Chinese view of nature from the viewpoints of Chinese eschatology and Messiah thought and the significance of the permanence of civilization.

### **Our Whole Lives Are in a Mirror**

#### **—the Tang Dynasty(唐代) “Mirror” Poems**

**SAKAI Tahoko**

To see one's own face and figure, an intermediary such as a mirror is needed. Looking at oneself in a mirror is an expression of one's interest in oneself. Chinese poems about looking at oneself in a mirror (which I will call “the mirror poems” here) first appeared during the Six Dynasties(六朝), after which both the number of poets composing on this subject and the number of mirror poems gradually increased. This demonstrates that the act of observing one's face in a mirror had become universal by Tang Dynasty(唐代). BAI Juyi(白居易), in particular, composed numerous mirror poems and is known for his poems about his aged countenance reflected in a mirror, and his works have already been researched. But looking at one's aged face in a mirror is not an activity that began with BAI Juyi(白居易). This paper will discuss what poets preceding BAI Juyi(白居易) saw when they viewed their reflections in a mirror, with particular attention paid to the works of XUE Ji(薛稷) of the early Tang Dynasty(唐代).

## **Transition in the Perceptions of Nature Conveyed by Contemporary Chinese Literature —Emanating from the *Xinshi* Poetry of Guo Moruo**

**YOKOUCHI Rina**

Chinese literature from that of the era of the *Shijing* (Book of songs) to the poetry created during the Tang Dynasty unabatedly and thoughtfully grappled with the subject of nature. Later, early after the establishment of the Republic of China, there appeared a new free-verse colloquial style of poetry, referred to as *xinshi* (new poetry). Meanwhile, *xinshi* poet Guo Moruo cast aside past literary traditions, and in the process not only revolutionized literary forms, but also transformed people's perceptions of nature through his works.

The author of this study objectively examines how the literature of Guo Moruo brought about changing perceptions of nature. In so doing, she considers the character of the medium that published many of Guo Moruo's *Nushen* (The goddesses) works, the *Shishixinbao* newspaper's *Xuedeng* (Lamp of learning) supplement, and also looks primarily at the works of Guo Moruo himself in showing what led publishers to feature *xinshi* poetry.

## **The Utility of Forests and the Significance of Wooded Areas —Sustainability Stemming from Rational Ecology and a Rational Perspective on Nature**

**SEKI (YAMAMURA) Yoko**

The environmental crisis facing our planet, obvious to all, calls for creation of a society in which co-evolution with natural ecosystems becomes a possibility. Accordingly the human race has been working to find means of achieving sustainable natural resource use, and is pursuing ecologically minded and rational approaches in that regard. Yet, even when attempts are made to reduce environmental loads—such as by implementing recycling and conservation initiatives, or by modifying technologies based on our knowledge of the natural sciences—the fact remains that society continues a relationship with nature defined by how we *use* nature. This is true even in regard to environmental initiatives that successfully help protect natural ecosystems. In other words, humankind does not necessarily overcome its destructive relationship with nature even when our use of natural resources minimizes burden on the environment, and in the process we manage to ecologically and rationally drawing on natural resources. To effectively combat the ongoing environmental crisis we need to build a relationship with nature that acknowledges the communicative capacity of nature, rather than trivializing nature by regarding it as a resource deemed valuable because of its utility to humankind. While drawing on structural concepts

proposed by Claude Levi-Strauss, this paper espouses a view of nature defined by a lack of awareness in regard to our respective cultures and customs, and stresses the significance of cultural implications of nature. More specifically, in analyzing the communicative capacity of nature, the objective notion of forests that can be put to effective or productive use is contrasted with the notion of wooded areas that are seen as culturally significant. Accordingly, the paper proposes that rather than regard woodlands objectively and globally as forests, coming to view them as wooded areas enables people who form society a different take on nature which, if seen as having meaning, becomes a particularly significant force in terms of its capacity to effect communication within society. Ultimately, analyzing nature as a structural concept leads to cultural approach that allows for the coexistence of social and natural systems.

## **Volunteering in Social Dilemmas behind Environmental Issues**

**OHSHIMA Takashi**

Social dilemma is a conflict between short-term individual interest and long-term collective interest. This structure lies behind many kinds of environmental issues. A typical situation is the N-person prisoner's dilemma (NPD) in which each member is better off choosing to defect than to cooperate no matter what other members choose while all members receive a lower payoff if all defect than if all cooperate. One way of leading members to cooperate is to reward cooperators or punish defectors. In order to implement such a management system without costs, some of the members should volunteer to monitor whether other members are cooperating or not. However, because volunteering needs costs, members face with another dilemma of the choice to volunteer. This type of dilemma is called a "volunteer's dilemma" (VOD). In this study, two experiments were conducted using networked computers. In Experiment 1, thirty-three students participated in the NPD games of five and six members. The result showed that less than half of the members cooperated and the number of cooperators decreased as the trials were repeated. In Experiment 2, VOD structure was implemented in the NPD games in such a way that the members were faced with the choice of cooperation, defection, or volunteering. In each trial, the defectors could get no score if there was at least one volunteer. With thirty-four student participants, the result showed a high rate of cooperation and a low rate of volunteering. The members seemed to cooperate to avoid getting no score and not to volunteer expecting others to do. The relation of the results to the environmental issues and the possible cultural differences were discussed.



## **Ecologically-conscious Behaviors from the Perspective of Cultural Psychology**

**SUGA Sayaka**

It is important to consider psychological processes when we try to solve various environmental issues. Social psychologists have demonstrated some factors which encourage ecologically-conscious behaviors. However, up to now they have paid very little attention to the relationship between cultural factors and ecologically-conscious behaviors. To assert the importance of taking cultural factors into consideration, this paper introduces some representative theories in the area of cultural psychology and explains their basic ideas and then proposes studies on ecologically-conscious behaviors from the perspective of cultural psychology. Finally, realistic strategies for encouraging ecologically-conscious behaviors based on cultural psychology knowledge are discussed.

## **Psychological Research and Environmental Education/ESD**

**HIGASHIGAKI Erika**

In recent years, efforts to educate the public about attitudes and behavior relating to environmental issues have been increasing in importance. This paper focuses on environmental education and education for sustainable development (ESD), which are part of this kind of education. In psychology, behavior related to environmental issues is called environmentally-conscious behavior, and extensive research has been carried out in how this behavior can be promoted and the factors that can impede it.

In that light, this paper described psychological research on the effects of environmental education/ESD and the factors defining environmentally-conscious behavior. Lastly, this paper raised points to be aware of in applying psychology-related knowledge to environmental education/ESD.

## **Challenges of Biodiversity**

**KAWAMOTO Hideo**

Two aspects of current discussion regarding biodiversity are considered: first, the question of what is meant by *biodiversity*, and second, the question of how international dialog and

corporate-based programs address the issue. I note that a scientific approach to the matter calls for quantifiable analysis, to the extent possible, and that looking at the issue in quantifiable terms can help reveal the many issues pertaining to biodiversity. Furthermore, I consider how companies concerned with biodiversity issues might and could take a business-minded approach to such challenges.

## **Unceasing Application of Alternative Approaches—Shusaku Arakawa and the Creative Environment**

**INAGAKI Satoshi**

The traditional philosophical approach pioneered by Aristotle has come to regard as an issue of primary importance finding out the relationship between humanity and the world as “a relationship that cannot exist through other means.” Nonetheless, one wonders to what degree universal necessity there is indeed in regard to the actual existence of humankind together with the world in which humanity resides. One attribute of humanity involves not only the fact that humankind applies alternative approaches in reconstructing the environment itself, but that humankind itself is altered by living in the environment that they themselves have reconstructed.

This paper reveals clues found in the works of Shusaku Arakawa that hint not at human necessity, but instead suggest that “humanity is able to exist through a means of continuously attempting alternative approaches”—the existence of human possibility. In looking at Arakawa’s works, this paper focuses on arguments in regard to how he incorporated essential environmental clues in the form of human gravitational and atmospheric experience into the architectural process.

## **Phenomenological Interpretation of Environmental Philosophy —Clues from Husserl's *Ideen***

**MUTO Shinji**

This study examines the theme of environmental philosophy, with the primary aim of conducting a philosophical inquiry that delves more into the realm of nature than the environment. In so doing, they employ an approach based on the premise that the environment is formed of the interrelationship between people and nature. Given this view, the study employs a phenomenological approach as its observation methodology. Moreover, the study attempts to use Husserlian phenomenology to convey the team’s perspective in regard to the phenomenon of

nature, and furthermore to highlight the areas covered by natural science disciplines. Through their observations, which are based on Husserlian phenomenology, the team inquires into the significance of a philosophical analysis of the environment, and furthermore, they revisit the issue from a pragmatic standpoint, which in other words involves looking at the environment either from a scientific and technological perspective, or alternatively from an ethical perspective.

## **The Concept of Human Systems in Sustainability Science: The Humanities Niche and ‘Mean Language’—a Human Ontological Approach**

**UEGAKI Takahide**

Since the Our Common Future report by the Brundtland Commission in 1986, the concept of sustainable development has become better known as the more generalized concept of sustainability. Particularly noteworthy from the academic aspect is the movement in recent years that seeks to create a framework for a new discipline and a methodology for interdisciplinary studies with sustainability as the key term: representative of this is sustainability science, advocated by the Integrated Research System for Sustainability Science (IR3S).

This paper, after confirming the research framework of sustainability science, will explore the concept of human systems, and particularly the contributions that can be expected from the humanities. To clarify the concept of human systems, which is differentiated from social systems, it is necessary to make clear the differences between ‘system language’ and ‘mean language’, since only then does the unique niche occupied by the humanities in sustainability science become clear. Finally, in this paper, we refer to a problem from the approach of the human ontological theory that is one of the examples to think about sustainability from ‘mean language’.

## VI 講演会資料

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)2010 セミナー

## 環境／人間学—環境問題への「人間学的」アプローチ—

・開会の辞

大島 尚 (東洋大学教授)

・講演者紹介

関 (山村) 陽子 (東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ助手)

・基調講演

「近代文明を超えてエコロジー文明へ

—労働とコミュニケーションの思想的系譜にふれつつ—

尾関周二 氏 (東京農工大学教授、環境思想・教育研究会代表)

—休憩 15 分—

・研究概要報告

「環境問題に関する研究の紹介」

東垣絵里香 (東洋大学大学院社会学研究科 社会心理学専攻 博士後期課程)

・報告 (TIEPh 価値観・行動ユニットから)

「環境配慮の価値観と行動—社会心理学からのアプローチ」

大島 尚 (東洋大学教授) ・ 今井芳昭 (東洋大学教授)

—休憩 5 分—

・共同討議

・閉会の辞

山田利明 (東洋大学教授、「エコフィロソフィ」学際研究イニシアティブ機構長)

終了後親会 (17:30～ 4号館1階「stellar (ステラ)」にて)

【共催】

### 環 境 思 想 ・ 教 育 研 究 会

The Society for the Study of Environmental Thought and Education

【後援】

地球持続性の構築を目指すサステナビリティ学の人材育成・普及啓発・実践活動を目指して



一般社団法人 サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム  
Sustainability Science Consortium (SSC)

## セミナー

## 「環境／人間学—環境問題の「人間学的」アプローチ—」によせて

関（山村）陽子

(東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ助手／  
東京農工大学大学院 博士特別研究生)

地球環境を人間の学によって守る—この意義を問うことが今回の最大のテーマである。それも研究手法のたがう（社会）哲学と（社会）心理学の間で、いわずとも共通している“人間へのまなざし”が、今日の環境危機の克服に対していかなる道を示しうるか、これを問うのである。

この“まなざし”が生み出すものは、たとえば政治や経済、教育システムにおける、よりラディカルで原理的な人間のあり方をおしえる人間観である。

今回のセミナーのタイトルである「環境人間学」という学問分野は現在のところ存在していないが、哲学と心理学という異分野との交流を通じて、「人間学」として環境問題を総合的に考えるという『環境人間学』構築の第一歩となることを願い、このように題したのである。

今日の環境問題への関心は、近代文明がもたらした成果の反省の上に立っており、近代の経済的「進歩観」への変革をせまられていることを示している。この進歩観の特徴を—M・ウェーバー風に一言であらわすならば、合理性や合理化への信奉といえるであろう。これによって科学技術は飛躍的に発展し、機械化や工業化が推し進められ、規格化や画一化によって生産性は大いに拡大したのである。進歩観はまた、「競争原理」によって語ることもできる。とりわけ資本主義経済社会における進歩の原動力であるとみなされてきた「競争」は、規格化され限られた指標のうちに、適者を望む者にとっての他者を不適者にする原理なのである。

つまるところ、一面での豊かさをもたらした近代の科学的・経済的進歩とは、複数面の「支配」や「抑圧」、「搾取」なしでは成し得なかったのである。労働者、女性、黒人、そして自然・・・これらから奪われたものは、「人格」「目的」「尊厳」「多様性」「複雑性」「相互関係」などであり、すなわち、生きがい、生きる意味、やる気、楽しみである。

これらを損なうことのない社会進化、ないし文明の構築には、競争のために個別化した（自己）利益追求型の人間観の変革を必要とするのである。関連するところでいえば、経済学者のA・センは経済学的人間観（「合理的な愚か者」）への批判から「共感とコミットメント」の人間観を提出したように、今回の社会心理学の成果報告における、人が他者に“配慮する”“関わろうとする”（いわばコミュニケーション）という側面で人間を分析する視角は、エコシステムの存立条件となる人間観を提示していると言えるであろう。なぜならば、自己利益を追求する利己主義や個人主義的な人間観を要請する「合理的近代」の

文明から、「コミュニケーションの合理性」が発揮されるような文明が要請するものは一尾関氏によれば、「自然」という存在なのである。尾関氏は、近代における「労働」を再度“工場”から「生活世界」へ引き戻すという理論作業を通じて、人間、社会、自然を架橋するようなコミュニケーションの可能性を提示する。

また、社会心理学における「行動」の研究と、その行動因となる「価値観」に関する研究成果は、このコミュニケーションに支えられた「エコロジー文明」あるいは「共生型共同社会」を考察する上での、重要な人間学的アプローチとなることであろう。

# 環境人間学配布資料（大島 尚）

## TIEPhと「第2ユニット」について

### TIEPhとは

- ▶ Transdisciplinary Initiative for “Eco-Philosophy”  
(東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ)
- ▶ Transdisciplinary Initiative for Global Sustainability  
(TIGS: 東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ)
- ▶ Integrated Research System for Sustainability Science  
(IR3S: 東京大学サステナビリティ学連携研究機構)

### TIEPhの歴史

- ▶ 2005  
科学振興調整費により東京大学にIR3Sが発足  
連携機関の募集に応募  
大学院文学研究科、社会学研究科、国際地域学研究科を基盤とした「TIHCS: Transdisciplinary Initiative for Harmonious Coexistence Study」(共生学研究イニシアティブ)の設置を提案
- ▶ 2006  
IR3Sに協力機関として参加、「共生哲学」の研究を担当  
国際地域学研究科が加わらずに、TIEPhとして発足  
哲学科、インド哲学科、中国哲学文学科、社会心理学科の教員が参加

### TIEPhの歴史

- ▶ 2006～2009  
シンポジウム、講演会、研究会等の開催  
『「エコ・フィロソフィ」研究』の刊行  
アジア諸地域における価値意識調査の実施
- ▶ 2010.3  
IR3Sの研究期間が終了
- ▶ 2010.4～  
学内研究組織としてTIEPhを継続  
「サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム」(SSC)への参加  
「エコ・フィロソフィ」から「環境人間学」へ???

### TIEPhの研究ユニット

- ▶ 第1ユニット: 自然観探求ユニット  
自然と人間に関する東洋の知とエコロジーの研究
- ▶ 第2ユニット: 価値意識調査ユニット  
アジア諸地域におけるサステナビリティに関する価値意識の究明
- ▶ 第3ユニット: 環境デザインユニット  
環境倫理を含む哲学的環境デザインの追究
- ▶ 2010年から、第2ユニットを「価値観・行動ユニット」と改称
- ▶ 社会心理学の位置づけの探究…



## 環境人間学セミナー配布資料（尾関周二）

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ 2010 セミナー 10月23日  
「環境人間学—環境問題への人間学的アプローチ—」

### 近代文明を超えてエコロジー文明へ ——労働とコミュニケーションの思想的系譜にふれつつ——

尾関周二（東京農工大学）

#### [はじめに]

##### ◆「人間学的」アプローチとは？

「人間とは何か」・・・自己意識、理性、文化、社会規範、宗教等々

##### <二つの視点>

◇動物と人間の連続性（進化論）と不連続において

動物的生活（個体と種の再生産）の再生産

◇人間を関係性のなかで把握。関係性は活動によって形成される。

労働と言語的コミュニケーションは関係を媒介する活動。

人間と自然の関係・・・ **労働**—道具、目的表象

人間と人間の関係・・・ **言語的コミュニケーション**—言語・シンボル

##### ◆「近代文明」とは？

現代は500年ほど前にヨーロッパに始まった西欧<近代文明>の問題性が噴出してきた転換の時代とされる。近代文明とは何か。環境・エコロジー問題とはどう関係するのか。近代文明を超え、新たな文明をどう展望するのか。

#### [I] 前近代 (premodern) 自然循環のなかでの人間 共同体への個の一体化

##### 1) 人類の始原 (650万年前開始) 自然への人間の没入

◆ホミニゼーションと労働、言語の形成

◆採集狩猟時代

##### 2) 農業の始まりと文明化 (1万年前) 人間と自然の分離と相互性

◆<農>と定住生活 農耕・牧畜と共同体

\* 4大文明の発生（エジプト、メソポタミア、インダス、黄河）

都市、所有、文字、階級、国家等の発生、

##### 3) 古代文明の革新 (2500年前) 「精神革命」

哲学、仏教、儒教、←→文明の危機 環境と共同体の破壊

<Philosophia>の誕生 Logos (論理、言語、理性) の重視

\*タレス 「万物のアルケー」への問いかけ ミレトス学派

\*Aristoteles (前 384-322)

人間観——「ポリス的動物」(zoon politikon)

人間活動の基本分類

- a) theoria sophia (知恵) 認識活動
- b) praxis phronesis (思慮) <コミュニケーション>、実践
- c) poiesis techne (技術) <労働>、制作活動

## [II]近代文明の開始 (500 年前)

人間の自然からの離反

共同体と個の分裂

### 1) 近代(modernity)の始まり

#### ◆<労働>の発見と優位

◇労働思想の形成 労働と人間解放

\*自己労働による**私的所有権**の基礎付け (**Locke**) 市民革命の思想  
共同体所有から私的所有へ

\*経済的価値の源泉は? 自然価値説(ケネー) → **労働価値説 (Smith)**  
homo economicus

#### ◆<科学>知の生成と近代的個人の登場

##### 「近代哲学の父」Descartes

◇有機体的自然観から**機械論的自然観**へ

◇共同体の人間観から**個人主義的人間観**へ

人間と自然の二元論 心身問題

### 2) 近代社会の生成

(伝統的共同体の解体、植民地主義、資本の原始蓄積)

◇**市場経済社会** 「commercial society と見えざる手」(Smith)

「自然と人間の商品化」(**カール・ポランニー**)

◇**工業(産業)社会**

農業労働から工業労働への優位 近代都市の形成

#### **化石燃料依存社会**

農業労働の工業化・市場化

都市と農村の関係の逆転

◇**国民国家**の成立 Nationの形成 国家語・国民教育、印刷術、読み書き能力

ナショナリズム

◇**近代市民社会** 自由・平等・友愛

**市民的公共圏**—— <コミュニケーション共同体>の理念の復権

「市民」=富と教養を持つ自立した個人

### 3) 資本主義的近代化

人間と自然の搾取・支配 共同体の解体と孤立化

\* 資本主義社会の原理的解明（Marx『資本論』）

\* 資本の論理——資本の自己増殖（経済成長）→ 利潤主義、競争主義、  
（「資本」とは？——「自己増殖する貨幣」）

\* 「貨幣」の物神崇拜（フェティシズム）←→価値形成労働

\* 「疎外された労働」

< 疎外論 > → 自然疎外、人間疎外、自己疎外

労働 = 「人間と自然の物質代謝」を媒介するもの

\* 「疎外されたコミュニケーション」

< 物象化 > 人と人との関係がモノとモノとの関係として現象

\* マルクスの思想を Arbeit（労働）と Verkehr（交通）の内的連関の思想としてとらえる。

### 4) 現代社会の危機・・・近代文明の負の諸アスペクトの顕在化（20世紀後半以降）

◆ 地球環境問題（南北問題）と社会的孤立化問題

◇ 自然観の転換 「ディープ・エコロジー」（アルネ・ネス）

自然の道具的価値から「自然の内在的価値」へ

自然中心主義 vs 人間中心主義 → 共生の思想

◇ 人間観の転換

リベラリズム vs コミュニタリアニズム → 「リベラルな共同体」

（ロールズ vs サンドル）

◇ コミュニケーション・精神の病理と「過労死」

「システムによる生活世界の内的植民地化」（ハーバマス）

\* 市場経済と国家の肥大化によるシステム論理の

生活世界への浸透・再生産の阻害

\* コミュニケーションの物象化・病理 → 了解志向的行為の破壊

\* 公共圏によるシステムのコントロールの重要性

◆ グローバリゼーションの両義性

\* 日本の〈農〉の現実から見えてくるもの

—— 食料自給率 40%、「東京一極集中」と「限界集落」

\* 市場原理主義からの転換 世界市場のコントロール・縮減

\* グローバルな情報コミュニケーションの市民的・民衆的活用

**[Ⅲ] エコロジー文明へ**

**人間と自然の共生へ 共生型共同社会の構築へ**

脱近代(de-modernity)へ

近代の批判と継承すべき価値とは何か。近代を越えていく労働とコミュニケーションのあり方、そして社会のあり方とは？  
2500年前に匹敵する〈批判知〉の登場。

**1) 環境福祉社会（短・中期的視点）**

「環境と経済の両立」の発想から「環境と福祉の両立」の発想へ

- ◆ 農業労働、コミュニケーション労働、そして共同体の復権、
- ◆ 国民国家の枠組みを超え「環境福祉国家」群の連帯へ  
資本主義的世界市場経済への強力な統制による「環境と福祉の両立」
- ◆ コモンズ論の多様な展開へ  
種々の地域主義の展開 地産地消、生命地域主義、  
ソーシャル・エコロジー
- ◆ 市民社会論の新たな理解 重層的な公共圏  
〈市民社会(bürgerliche Gesellschaft=ブルジョア社会)から  
〈市民社会(Zivilgesellschaft)>へ

◇ 共生的なグローバル公共圏と開かれた地域共同体の相互補完関係

**2) 共生型共同社会（長期的視点）**

- ◆ 〈農〉を基礎に、持続可能な新たな共同社会の構築へ
- \* 小貫雅男らによる〈農〉を基礎にした「21世紀未来社会」の構想をヒントに。  
「週休五日制による三世代『菜園家族』を基盤に構成される社会」  
「農夫と賃労働者の二重化された性格」

< 補足資料 >

哲学の究極の課題としての人間学

近代哲学の総括者カントは、哲学の問題は次の3つの問いにまとめられると考えた。

1. わたしは何を知ることができるか。 . . . . . 認識論等
2. わたしは何をなすべきか。 . . . . . 道徳哲学等
3. わたしは何を望んでよいか。 . . . . . 歴史哲学、社会哲学

そしてこれらの問いは、究極的には

「人間とは何か」という問いに帰着すると考えた。

\*\*\*\*\*

コモンズの経済学（多辺田政弘）

※多辺田政弘「コモンズの経済学」学陽書房1990より

図3 健全なエコロジーがささえる経済

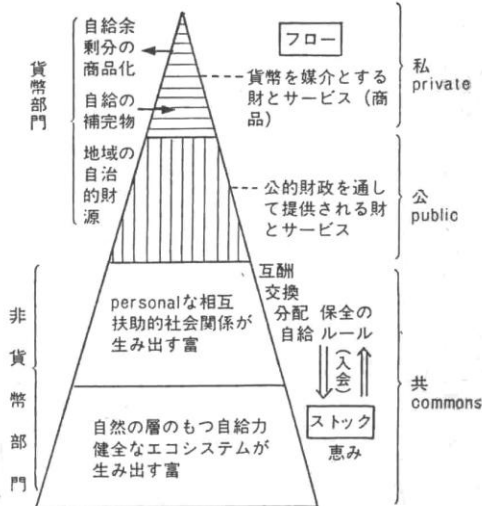
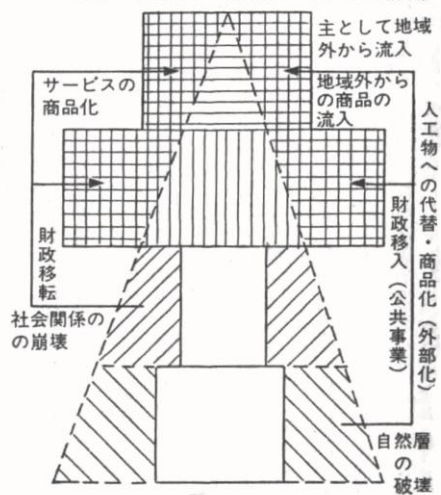


図4 非貨幣部門の破壊による経済成長（市場経済の社会からの突出とコモンズの崩壊）



# 環境人間学セミナー配布資料（東垣絵里香）

## 環境問題に関する 研究の紹介

—日本社会心理学会 第51回大会より—

東洋大学大学院 社会学研究科  
社会心理学専攻 博士後期課程  
東垣 絵里香

## 自己紹介

- 研究テーマ:「やる気」=動機づけ
  - 興味や関心がもてない
  - 成績の低さ
  - 消極的な思考
  - 物事への取り組みを先延ばしにしてしまう

→動機づけが高い人・低い人は何が違う？  
⇒達成目標理論

## 達成目標理論

- 達成状況下での「目標」により、行動・認知・感情が異なる、という理論。

### Mastery Goal

課題を自分のものにし、能力を高めることが目標

### Performance Goal

他者よりも有能であると見せることが目標

## 達成目標理論の実証研究

	Mastery Goal	Performance Goal
失敗したとき	あきらめない	無力感
学業への興味	高い	低い
学業で つまづいたとき	助けを求める	助けを求めない
課題の 難易度選択	?	易しい課題 を選択
試験は・・・	役に立つもの	大変なもの

## 社会心理学会について

- 日本社会心理学会 第51回大会

- 2010年9月17日・18日
  - 口頭発表:115件、ポスター発表290件
- 主領域が「環境問題」であるもの。
- 口頭発表:6件、ポスター発表5件

\* 他に、「コミュニティ」・「社会的ジレンマ」・  
「説得」・「広告」・「リスク認知」などの領域にお  
いても環境問題を扱った研究がなされている。

## 研究紹介1

- 「もったいない感情」と環境配慮行動  
(黒川, 2010)

↓  
そもそも「もったいない」とは？

↓  
もったいないと感じたとき・その理由を質問。  
⇒「尺度」の作成。

### 研究紹介1

- 「もったいない」のタイプ
  - ①無駄な使用
  - ②まだ使えるものを捨てた
  - ③余計な出費
  - ④用意をしたものを使わなかった
  - ⑤優秀な人が、その力を発揮できていない

**【結果】**

- 環境配慮行動と関連が見られたのは、①と②のタイプの「もったいない」。

2010/10/23 7

### 研究紹介2

- エコバッグの使用動機と環境配慮行動 (前田, 2010)

→エコバッグを使う理由・使わない理由

- 使う
  - A:環境によいことから
  - B:オシャレだから/ブランド物のエコバッグを持ちたいから
- 使わない
  - めんどろ、必要性を感じない、得をするなら使う

2010/10/23 8

### 研究紹介2

**【結果】**

- A:環境によいことから
  - 環境問題に対する意識を高める
  - 3R行動をとる意図も高める
- B:オシャレだから/ブランド物を持ちたいから
  - 環境問題に対する意識は高まらない
  - 3R行動をとる意図は高める

⇒環境問題に意識を持つための広い入り口・きっかけになる。  
(長期的に続くかどうかは今後、要検討。)

2010/10/23 9

### 研究紹介3

- 資源回収への参加の規定因 (大沼, 2010)

□札幌市での資源回収の2つのルート

集団資源回収:  
町内会・自治会・小学校PTA主体による回収

民間業者:  
業者の戸別訪問による回収

2010/10/23 10

### 研究紹介3

**【結果】**

	促進要因	阻害要因
集団資源回収	・地域のためになると嬉しい ・全員での取り組みが有効	・どこで回収しているかわからない ・参加へのコスト感
民間業者	・フリーライド懸念 ・集団資源回収の有効性への疑問	・地域活動への参加の煩わしさ

2010/10/23 11

### 引用文献

黒川 雅幸 (2010). もったいない感情が環境配慮行動に及ぼす影響 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 178-179.

前田 洋光 (2010). エコバッグの使用動機が環境配慮行動に及ぼす影響 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 182-183.

大沼 進 (2010). 集団資源回収への参加の規定因—札幌市の取り組み事例— 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 38-39.

2010/10/23 12

# 環境人間学セミナー配布資料（今井芳昭）



環境人間学



TIEPh  
Transdisciplinary Institute for Eco-Philosophy

## 「環境配慮行動の規定因」

計画的行動理論からのアプローチ



社会心理学科  
今井芳昭

1

## 本報告の内容

- (1) 環境配慮行動とは
- (2) 人の行動に影響を与えている要因  
計画的行動理論 (Ajzen, 1991)
- (3) 態度変容と行動変容

2

## (1) 環境配慮行動とは



3

- サステナビリティ (sustainability)  
持続可能性  
現在の地球環境（生物、資源、気候など）  
を将来の世代にも伝達可能にしていくこと
- 環境配慮行動  
サステナビリティを実現するための行動  
地球環境を配慮した行動  
(例) 資源の有効活用、オゾン層の非破壊、  
二酸化炭素排出抑制など

4

- 様々なレベルにおけるCO<sub>2</sub>抑制行動

① 国際レベルでの対応

- 京都議定書 (1997)
- IPCC(気候変動に関する  
政府間パネル)第4次報告書(2007)
- 国連気候変動サミット (2009)

5

■温暖化防止交渉の歩み

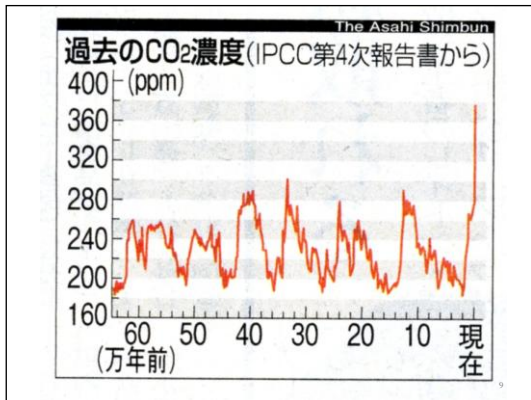
1990年8月	IPCCが第1次報告書、「2100年までに地球の平均気温が3度上昇」
92年5月	国連気候変動枠組み条約をニューヨークで採択。「地球の気候に危険がない水準に大気中の温室効果ガス濃度を安定化させる目的」
94年3月	枠組み条約が発効
95年11月	IPCC第2次報告書で「温暖化がすでに起きている証拠がある」
97年12月	CO <sub>2</sub> で京都議定書を採択。「先進国は08-12年の温室効果ガス排出量を90年比5.2%減らす」
2001年3月	米国の京都議定書からの離脱表明
02年6月	日本が京都議定書を批准
04年11月	ロシアが京都議定書批准
05年2月	京都議定書が発効
07年2月	IPCC第4次報告書で温暖化は「人為起源の可能性が非常に高い」
10月	IPCCとゴア元米副大統領にノーベル平和賞
12月	CO <sub>2</sub> 削減で「13年以降の温暖化対策（ポスト京都議定書）はCOP15で合意する」ことに合意
08年7月	北海道釧路サミットでG8が「2050年の温室効果ガス排出量を世界全体で半減」で合意
09年7月	イタリアでの主要経済国フォーラムで「温暖化による気温上昇を2度に抑える」で合意
12月	デンマークでCOP15

6





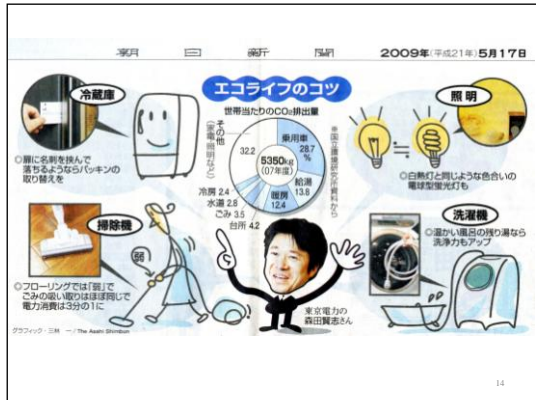
4月14日  
アイスランド  
エイヤフィヤトラヨークトル火山の噴火  
→ 寒化化？

- ② 国レベルでの施策
- 代替エネルギー（風力、太陽光）、
  - 排出CO<sub>2</sub>の回収・貯留技術の  
開発推進
  - 各種の法整備
  - 「地球温暖化対策推進法」
  - 環境省のキャンペーン
  - [チャレンジ25](#)

- ③ 地方自治レベルでの施策
- ゴミの分別回収、
  - 公共事業の環境影響評価、条例整備
- ④ 企業、事業者レベルの対策
- 適正冷暖房、昼休み消灯、両面コピー、
  - ノー残業デー、過剰包装の廃止、
  - 環境研修、環境保全運動推進

- ⑤ 家庭レベルの行動
- 牛乳パック・新聞紙などのリサイクル、
  - リサイクル商品の使用、
  - 風呂の残り湯活用、コンセントを抜く、
  - 詰め替え製品の利用、買い物袋の持参、
  - エコマーク商品の購入、洗剤の適正利用、
  - ゴミの減量化、ゴミの分別、
  - 適正冷暖房、低公害車の利用、
  - 太陽光発電の設置、住宅の断熱
- 環境省総合環境政策局(2004)



⑥ 個人レベルの行動

- 節電(電気製品のスイッチ、階段利用、衣類で体温調節、朝型の生活サイクル)
- 公共交通の利用、しんどい距離でも歩く、適正自動車運転
- ゴミの減量化(箸を持ち歩く、小さな紙でもリサイクル、 unnecessary 包装は断る、充電式乾電池の利用、必要なものだけを買うなど)
- 節水



- 多くのの人に環境を配慮した行動を取ってもらうには、どのようにしたらよいのか？
- 私たちは、どのような要因の影響を受けて、ある行動を取っているのか？

↓

その1つの答えが、計画的行動理論  
Ajzen (1991)  
Theory of Planned Behavior (TPB)  
3つの要因

① 態度

- ☆ 環境配慮行動をどの程度ポジティブ(良い望ましいなど)なものとして捉えているか  
例) ゴミを分別して捨てる。  
ものをできるだけ再利用する。
- ☆ 環境配慮行動に対してポジティブな態度をもっているほど、その行動を取る確率は高くなると考えられる。

☆ 日常的な言葉としての「態度」  
 特定の(観察可能な)行動パターン

☆ 「態度」という概念は、  
 行動を予測するためのもの  
 仮説的構成概念

態度の把握 → 行動の予測  
 (例) 政党に対する態度 → 投票行動  
 環境に対する態度 → 環境配慮行動

19

② 主観的規範

☆ 社会的規範に対する「主観的規範」

☆ 行為者にとって重要な他者(友人、恋人、配偶者、親など大事な人たちが)、  
 環境配慮行動を取ることを  
 どの程度行為者に期待していると  
 (行為者自身が)認識しているか。  
 → 行為者の行動規範になる。

20

(例) 家族から節電することをどの程度  
 期待されているか。

☆ 他者から期待されていると行為者が  
 認識しているほど、その行動を取る確率  
 は高くなると考えられる。

☆ 周囲にいる人に環境配慮行動を取る  
 よう声を掛け合うことによって、副次的な  
 効果が期待できる。

21

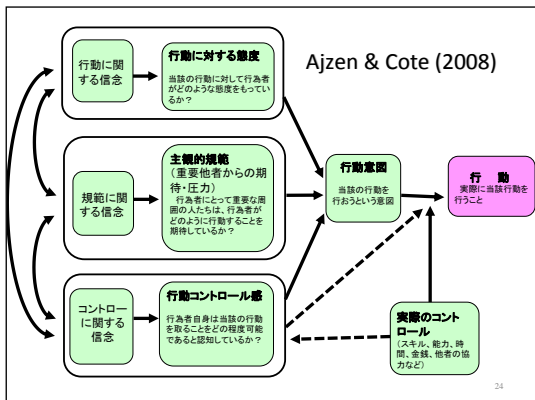
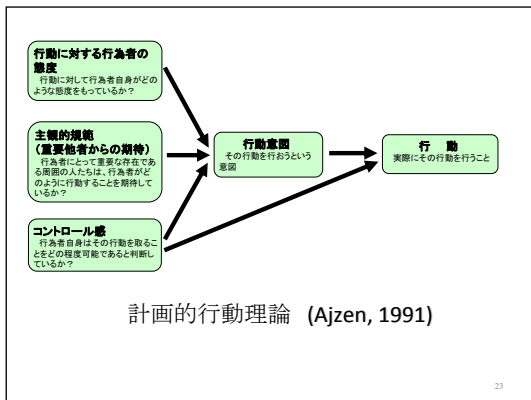
③ コントロール感

☆ 「環境配慮行動を行うことができる」とい  
 う認識

☆ 行為者にとって

- ・行動を取る時間的、金銭的な余裕があり
- ・行動を取る方法を知っており、
- ・それを行う技能を身につけているならば、  
 コントロール感は高くなる。

22



- 計画的行動理論の枠組みを用いて、私たちの行動をどの程度説明できるのか？

☆ Armitage & Conner (2001)

計画的行動理論の妥当性に関するメタ分析(諸研究の知見の総括)

諸研究で取り上げられていた意図的な行動の種類とは？

25

(a)健康関連行動

- キャンパスや社内での禁煙
- 禁酒
- 母親による乳児の糖分摂取量制限
- 健康診断、乳がん検診の受診
- 健康増進のための運動
- 小中学生の朝食摂取
- 歯磨き

26

(b)その他

- 自家用車からバス通勤への変更
- リサイクル行動
- レジャー行動の選択
- 臓器提供、献血
- 株式投資
- 攻撃行動の抑制

185の研究結果から見出されたことは？

27

- その結果、

☆上記の3要因で  
行動意図の 39%  
実際の行動の 27%

を説明可能



つまり、

28

☆ 環境配慮行動を取ろうという意図の約4割は、

- ① 環境配慮行動に対してポジティブな態度をもっていること
  - ② 環境配慮行動を取ることを重要他者から期待されていること
  - ③ 環境配慮行動を実施できると認識していること
- によって説明できそうである。

☆ 実際の行動が取られるかどうかとなるとその数値が約3割になる。

29

- 今井(2009)の研究

☆ 大学生314人を対象にした質問紙調査

☆ 上記の3要因+行動意図の他に、

- 環境問題に関する知識
- 自分に責任があると思う程度
- 自我関与度
- 周囲にいる重要他者の実行度
- 過去1ヶ月間の実行度について測定

☆ 134人には、その2週後にさらに、2週間の実行度についても回答してもらった。

30

・ 調査で用いた環境配慮行動(7点尺度)

1. 蛇口の栓をこまめに閉める
2. 暖房の設定温度を低めにする
3. そのために厚着をする
4. 電気製品の主電源をこまめに切る
5. 入浴時のシャワーをこまめに止める
6. 冷蔵庫のドアをすぐに閉める
7. コンビニでレジ袋をもらわない

31

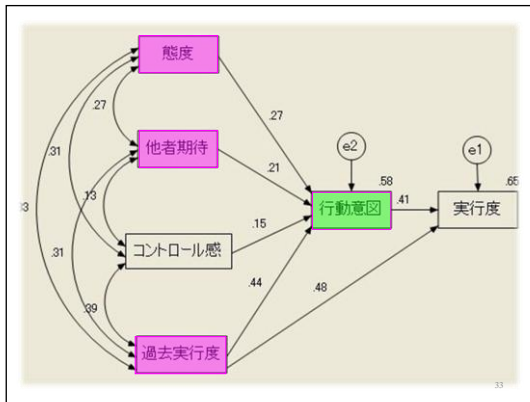
☆ 7点尺度の例

「冷蔵庫のドアをすぐに閉めるようにする。」

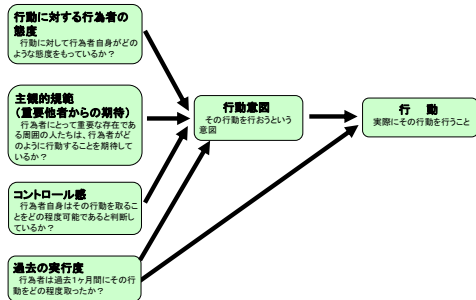
一度も 毎日  
 行ったことがない そうしている  
 1・2・3・4・5・6・7

質問項目を読み、自分の考えに基づいて、1~7の数字の内1つを選び、○で囲む。

32



33



今井(2009)の分析結果に基づくモデル

34

(3) 態度変容と行動変容



35

☆ それでは、人々に環境配慮行動に対してポジティブな態度をもってもらうようにするには、どうしたらよいのか？

- ・ それを研究しているのが、社会心理学における説得の研究



その成果をまとめると？

36

☆ 環境配慮行動に対してポジティブな態度をもってもらうようにするには

- ① 環境配慮行動を取ることが、行為者の生活、人生に関わる重要な事項であることを指摘する。（自我関与度）
- ② その上で、環境に配慮した行動を取ることの必要性を説く情報を提供する。

37

- ③ その際、環境配慮行動の長所だけでなく短所についても触れ、公平な立場から指摘する。
- ④ 短所を反駁する情報も提供する。
- ⑤ 受け手の自我関与度が高い場合は、長所を最後にもってきた方が効果的なようである（順序効果）。
- ⑥ 他の多くの人が既に環境を配慮した行動を取っていることを指摘する。（社会的影響）

38

☆ それでは、実際に環境配慮行動を取ってもらうようにするには、どうしたらよいのか？

- まずは、環境配慮行動に関わりをもってもらおう（コミットメント）。



39

### ① コミットメントとは

☆何らかの関わりをもつこと  
あることを行うという宣言（公表）  
署名  
ちょっとしたことの実行など

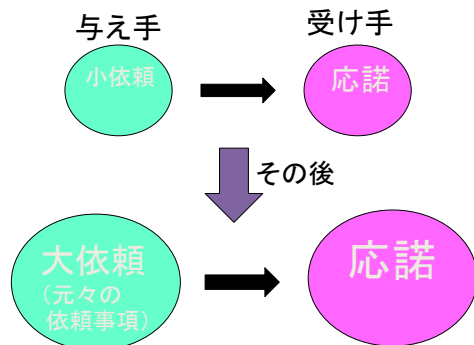
☆コミットメント → 言行一致の重視  
実際に述べたことや行ったことに合致するように、その後の行動が規定される。

40

### ② コミットさせるには

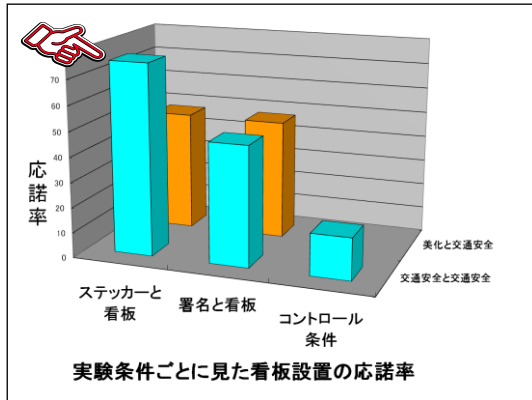
(a) Foot-in-the-door法（段階的依頼法）  
Freedman & Fraser (1966)  
応諾コストの小さい依頼  
↓  
受け手の応諾（コミットメント）  
↓  
応諾コストの大きい依頼  
（応諾されやすくなる）

41



42





(b) イメージ法

Gregory, Cialdini, & Carpenter (1982)

<ケーブルテレビ導入>

- a. 情報の提示のみ (19.5%)
- b. 導入後の自分の生活をイメージ (47.4%)

・ イメージ(想像)によるコミットメント、そして、自己説得

- ・ 自己説得 (self-persuasion)  
他の人に説得するという役割演技を通じて、その人自身が説得されること
- ・ Pratkanis & Aronson (1998)  
ある役割を演技させる。  
ある行動を取っていることを想像させる  
➡ 行動の変容につながる。

☆ そうした状況を作る一つの方法として...

<説得納得ゲーム> 杉浦 (2003, 2005)

- \* ゲームの目的: 反論する相手を説得して、納得してもらったらその証拠としてサインをもらう。できるだけ多くのサインを集めることが目的。
- \* 説得の送り手と受け手の双方を順番に体験する。
- \* 特定の説得テーマ(例えば、環境配慮行動)についてゲームすることにより、自己説得される可能性が高い。

☆ イメージ想起でも他者説得でも説得テーマにコミットする(関わりをもつ)ことになる。

☆ 説得納得ゲームは、環境配慮行動にコミットする一つのきっかけを与えることになる。



コミットした内容に沿った認知、行動が生じやすくなる。

本日のまとめ

- ① 家庭、個人レベルの環境配慮行動をいかに実行してもらうか?
- ② 環境配慮行動に対するポジティブな態度、重要他者からの期待、コントロール感、過去の実績が行動意図に影響を与える。
- ③ 実行のための敷居を低くして、とにかくコミットしてもらう工夫をする。  
イメージ法、フット・イン・ザ・ドア法

## 引用文献

Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **50**, 179–211.

Ajzen, I. & Cote, N. G. (2008). Attitudes and the prediction of behavior. In W. D. Crano & R. Prislin (Eds.) *Attitudes and attitude change*. (pp. 289–311). New York: Psychology Press.

49

Armitage, C. J. & Conner, M. (2001). Efficacy of the theory of planned behavior: A meta-analytic review. *British Journal of Social Psychology*, **40**, 471–499.

Freedman, J. L. & Fraser, S. C. (1966). Compliance without pressure: The foot-in-the-door technique. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 195–202.

50

Gregory, W. L., Cialdini, R. B., & Carpenter, K. M. (1982). Self-relevant scenarios as mediators of likelihood estimates and compliance: Does imagining make it so? *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 89–99.

今井芳昭 (2009) 計画的行動理論から見た環境配慮行動の規定因 日本心理学会第73回大会発表論文集（於：立命館大学）

51

Pratkanis, A. & Aronson, E. (1998). *Age of propaganda: The everyday use and abuse of persuasion*. New York: W. H. Freeman. 社会行動研究会 (訳)(1998) プロパガンダ—広告政治宣伝のからくりを見抜く— 誠信書房

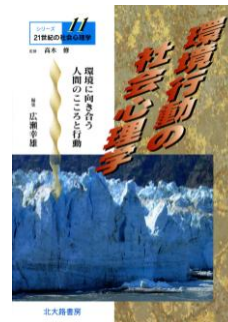
52

その他、「人に影響を与えること」に関する書籍として...

今井芳昭 (2010) 影響力 光文社新書  
ゴールドスタインら (2009) 影響力の武器 実践篇 誠信書房  
チャルディーニ (2007) 影響力の武器 第2版 誠信書房

53

- 環境配慮行動に関する社会心理学的研究を紹介している本として



54



「エコ・フィロソフィ」研究  
*Eco-Philosophy* Vol. 5

平成 23 年 3 月 1 日発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ  
(TIEPh) 事務局

住所：東京都文京区白山 5 丁目 28-20  
6 号館 4F 60458 室

TEL：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp

Homepage：http://tieph.toyo.ac.jp/